

【座談会】環境建築かく戦えり

岩村和夫 × 大野二郎 × 宿谷昌則 × 高間三郎 × 野沢正光

話し手 (2013 年 1 月現在)

岩村 和夫

Kazuo Iwamura

東京都市大学・同大学院教授、岩村アトリエ代表取締役／1948 年生まれ。早稲田大学卒業。同大学大学院修了。工学修士。環境デザイン。著書に『自然な構造体 (訳著)』『環境建築論』『環境共生住宅 A-Z』『地球環境建築のすすめ』『地球環境時代のまちづくり』ほか。作品に「自邸—カッセル・エコロジー団地」「世田谷区深沢環境共生住宅」「屋久島環境共生住宅」「神戸ドイツ学院／ヨーロッパンスクール」ほか、2001 年国連 World Habitat Awards、2003 年日本建築学会賞 (業績) など多数

大野 二郎

Jiro Ohno

日本設計環境創造マネジメントセンター (CEDeMa) 長／1948 年生まれ。日本大学大学院修了。環境建築デザイン。共著書に『ソーラーアーキテクチャー・デザインブック』『太陽光発電の効果的な導入のために』。作品に「沖縄熱帯ドリームセンター」(BCS 賞ほか)、「投資育成ビル」(グッドデザイン賞ほか)、「日本大学船橋校舎 14 号館」(JIA 環境建築優秀賞ほか)

宿谷 昌則

Masanori Shukuya

東京都市大学環境学部環境創生学科教授／1953 年生まれ。早稲田大学卒業。同大学大学院修了。工学博士。建築環境学。著書に『エクセルギーと環境の理論—改訂版』『Exergy: Theory and Applications in the Built Environment』ほか。2001 年日本建築学会賞 (論文)、2012 年日本建築学会教育賞 (教育業績)

高間 三郎

Saburo Takama

科学応用冷暖研究所所長／1941 年生まれ。早稲田大学卒業。同大学大学院修士課程修了。2007 年都市住宅学会賞 (著作賞)、1966・2003・2004・2006・2009・2011・2012 年日本建築学会作品選奨ほか

野沢 正光

Masamitsu Nozawa

(有) 野沢正光建築工房代表取締役／1944 年東京都生まれ。1969 年東京藝術大学美術学部建築科卒業。1970 年(株)大高建築事務所入所。1974 年野沢正光建築工房設立。2002 年 JIA 第 3 回環境建築賞一般建築部門最優秀賞「いわむらかずお絵本の丘美術館」、2012 年日本建築学会作品選奨「立川市庁舎」ほか

前 真之（東京大学准教授）

渡邊浩文（東北工業大学教授）

前——本日の座談会のテーマは「環境建築」となります。日本の環境建築の歴史をまさに作ってこられた5人の先生方に、それぞれの立場からこれまでの経験を振り返っていただき、そして今後の展望についてお話いただきます。

環境建築を振り返って

前——まず、みなさんのこれまでの活動を振り返り、環境建築という分野と係わることになったきっかけや現在の関心事をお話してください。

野沢——環境がテーマということですが、僕自身は環境建築という括り方ではなく、あくまで建築という括りで取り組んできました。建築を探求する興味の主題として、社会に対する説得力という意味では、快適性や環境、エネルギーなどは、大きな主題となりうるだろうと考えてきました。

オイルショック以前は、環境は未開の分野であり、解析ツールも未発達であったため、解決することが難しい領域だと考えられていました。分野としての難しさが興味を惹き、環境を主題としながら建築の設計を進めることになりました。

1981年にレイナー・バンハムの『環境としての建築』が翻訳されて、はじめて古典的美学ではなく、設備的な領域に焦点を当てて、ライトやフォスターの建築が紹介されました。自分の注目していた領域が脚光を浴びたことで、してやったり、と感じた記憶があります。

近年は、JIAで環境建築賞の審査を務めていますが、要素技術がメニュー化して、それにとられる傾向が強まったように感じています。自発の興味によってユニークなものにするという視点が欠けていることを懸念しています。

宿谷——本日は、環境工学の専門家としてお招きいただいているのだと思いますが、環境工学という名称はあまり好きではなく、建築環境学という捉え方をしています。建築環境学と言うと、作り手の立場が先行し、住まい手の立場を考えていないのではないかと若い頃に直感的に感じていました。経験を重ねる過程で、人体のしくみまで考慮し、設備的なヒートポンプや発電所のしくみを理解し、全体的な視点を持つことが大事なのではないかと思いつき、「エクセルギー」の研究に携わってきました。

エクセルギーという視点を通して環境建築を見渡すと、その重要性が良く理解できました。住まい手と一緒にやっていくという視点は、建築環境学にとって、とても重要なのではないかと感じています。自宅の集合住宅の専有部分の断熱改修を行ったのですが（図1）、家族の反応を見ると、建物の中の時間の流れがゆっくり感じられるようになったといいます。それは快適さによるものですが、いわゆる環境建築でうまくいっているものを訪問させていただくと、同様の反応に出会います。

定量化しづらい話ではありますが、生き物としての人間の感覚というのは大事ではないかと思っています。そういったことを感じることができる建築が増えていくと、巨大技術への依存から脱却するきっかけにもなるのではないのでしょうか。

大野——私が以前担当した、沖縄熱帯ドリームセンター(図2)では、沖縄の気候風土をうまく取り込み、防風壁を作ることによって潮風防御と冬期の蓄熱壁の役割を果たし、熱帯植物の育成に最適な環境を実現しました。こうした経験を通じて、環境建築に興味をもちました。最近では、NEDO(新エネルギー・産業技術総合開発機構)から太陽電池のことを聞き、可能性を感じています。電気は門外漢ですが、太陽電池は発電機が可視化されるということですから、太陽の位置が要素として計画に盛り込まれるなど、面白さを感じています。

環境に対する意匠と設備の関係には、少し違和感を覚えています。社内では設備部が環境設備部という名称に変わりましたが、エネルギーや空調機を担う、いわゆる機械学科出身の人が環境を担当し、明確に部署として区分がつくことで意匠設計者は設備設計者に任せておけばいいという考え方になってしまいました。

近頃は、エネルギーとIT化の延長線上で、スマートシティという話が話題になっています。しかし住宅はエネルギーとITだけで語ることはできません。地域ポテンシャルという言葉が重要だと感じています。気候やエネルギーをはじめとして、歴史文化が背景として存在している地域の中で、形が消えていくような、景観よりも風景に近づいていく方向で取り組めれば、面白いのではないかと感じています。

岩村——私の事務所では、開設当初から「環境」を意識しながら、建築や都市の研究・計画・デザインをしてきました。「なぜ環境なのか」という話ですが、学生時代から建築というのをもう少し大きな枠組みで捉えたいと感じていたからです。かつて60年代のバックミンスター・フラーは、「宇宙船地球号」等をはじめとして、建築の概念を拡大してくれた最もパワフルな存在でした。そして、そこに自然界との関係で有機的な美しい形を与えてくれたのがフライ・オットーで、彼のとても難解な著作「自然な構造体」を翻訳した際に、建築構造における概念の深みと大きな広がりを実感しました。

また、クリストファー・アレグザンダーは、大阪万博の大屋根の中で社会学や地域に根差す建築技術に依拠した、「人間都市」と題するとともにヒューマンなセルフビルドの居住環境を提示しました。当時の私はそうした新たな枠組みに大変強く惹かれました。

その後、約7年間ヨーロッパや中近東に暮らしたのですが、地球、地域、歴史、まち、建築、家、コミュニティ、生活文化等、互いに連関する多様な環境要素の関係性の一端を体得することができました。環境建築とはその総体を意味するものだと考えています。その後随分時間が経ち年もとりましたが、僕が最近しみじみ感じるのは、我々の日常には凜とした場面だけではなく、そもそももっと「だらっ」とした部分があり、そうした人間的な部分も引き受けてくれる建築が「良い建築」なのではないかということです。それを可能にする前提として、環境に配慮した建築があるのではないかと思うのです。

そのためには、建築の技術的な話だけではなくて、コミュニティや隣人を含めた暮らし方(ライフスタイル)の視点も含めて、捉えられるべきではないのでしょうか。そうした人間的、社会的プロセスを孕んだ方法論や全体像を描いていければと考えています。

高間——僕は設備設計者の立場ですので、多くの建築家と仕事をしてきました。様々な立場の方がいますが、最終的には住む人・使う人が楽しくできればいいのではないかと考えています。環境という分野では、大局的な観点から議論もされていますが、建築そのものがそもそも環境にいいのかという問題がありますので、それぞれの建築を使う人がよければいいのではないかとという視点が先に立つのだろうと感じています。

自分が担当した建築の話をしてしまうと、まずネクスト 21 が挙げられます。約 20 年前にちょうど 20 年後の現在を予想して設計をした建物です。テーマであった、「植物と人間の共生」に関しては、現在でも価値観は大きく変わっていませんが、テクノロジーに関しては大きく変わってしまいました。燃料電池を根幹として建築をつくるという、意欲的な試みだったのですが、燃料電池の形態が当時採用した大型の燃料電池で集合化したものから、個別化に集約される事になりました。

次が地球のたまごです。パッシブデザインを採用した建物だけではなく、敷地の全体を対象として、水質浄化やエネルギー自給率を高めるなど様々な工夫が採用された計画になりました。

金沢海みらい図書館では、スキンと設備との組み合わせでどのようなことができるのかがテーマでした。外気冷房による空調を採用して、エネルギー消費量の大幅な削減を実現しました。熱源別のエネルギー消費量を確認してみますと、空調は全部ガスですが、中間期ではほとんどガスの消費がないので効果を発揮していると言えるのではないのでしょうか。

「良い」環境建築とは何か

前——環境建築における「良い建築」というのはどのようなものなのでしょうか。「良い建築」というのは、幅があるはずなのに、最近の社会の流れでは、CO₂ という 1 つの指標に偏重しすぎているのではないかと疑問も感じます。多重的な議論を進めるため、みなさんなりの「良い建築」という観点からお話してください。

宿谷——CO₂ が全て悪者であるという認識には疑問を抱いています。CO₂ については無制限に排出してもいいとまでは思いませんが、CO₂ に関して思考停止をしている人があまりにも多すぎるように感じます。このことが、環境建築がこれから増えていくための妨げになりかねないと懸念しています。京都議定書は 1 つの貢献でもありましたが、ある意味ではブレーキにもなっているように感じます。

前——環境建築はコストの高さも問題としてあげられます。社会にとって環境にお金をかけることに対して是非もあるようですが、どのようにお考えでしょうか。

岩村——コストに関して見れば、費用対効果という観点から精査する必要があります。近年、建築環境性能評価や環境不動産の分野で、環境に配慮した建物には、利用する段階で様々な便益を享受できることが明らかになってきています。経済と連動するオフィスにおける知的生産性の向上のような話も含まれます。そんな流れの中で、UNEP (国連環境計画) 等で環境不動産の評価軸を国際的に共通化するべきという動きが進んでいて、国際的な投資と係る不動産鑑定の世界も強い興味を示しています。

僕は CASBEE（総合的建築環境性能評価システム）の作成にも当初から関わってきましたが、近年の傾向として建築の専門家だけではなく、経済や不動産の関係者も交えた研究や議論が進み、その結果環境建築の具体的な経済的メリットが明らかになってきました。例えば、賃料への波及効果や快適な空間における作業効率の向上を金銭的に計上できるようになってきたことです。また、これまで外部不経済として扱われてきた項目の内部化も無視できません。シックビル（ハウス）のような健康のテーマを例にとると、病院にかかる費用や交通費を計上することで、室内環境を向上させた方が経済的にもメリットが大きいことがわかります。

大野——エネルギーを多く消費しても、社会的なインパクトを与えるような建築は 1~2 つはあってもいいのかもしれませんが、全員で取り組むべきものではありません。社会全体を引き上げる役割の中に作家的な建物があってもいいと思いますが、仮に XY の 2 つの軸を想定した時に、どちらの方向を選んでもベースはマイナス側に行かないようにしないとダメです。エネルギーを例にとっても、足を引っ張らないような建築を作っていきたいと考えています。環境建築という言葉は昔から使われていますが、100 年後に我々が何をしていたのか、という視点も考慮する必要があります。単に小手先の技術だけでやり過ごすのではなく、問題と向き合い、ピンチをうまく逆手に取って、エネルギーの重要性が増す時代における従来とは異なる建築像を提示できると良いのではないのでしょうか。

宿谷——エクセルギーの研究をするなかで、ものすごく大きな発見だと感じたのは、植物の光合成を分析すると、電気分解に相当することを行っていることがわかったことです。植物の葉を太陽電池と見立てることもできます。大量の水が蒸発することで光合成が行われていることがわかっています。緑と建築の関係では水の蒸発散を非常に大事にするということを建築家の人たちが試みていますが、自然の原理に通じることが行われているようにみえます。原発事故をきっかけにエネルギーシステムの見方が変わりましたが、小型分散化という観点から考えると、生き物はすべて細胞内にミトコンドリアをもっていますが、これを熱力学的にはエネファーム的なものを内蔵しているとも考えることもできます。良い建築をつくるベースとして、生物の原理を模倣する方向に進むだろうと感じています。

野沢——僕らを育てた吉村順三という建築家は、今のお話しにあった原始的な理に対して、非常に体験的に確認する人だったように感じます。彼の設計した家には、暖炉が計画されていますが、暖炉に火をともしると空気の流れの変化や湿度のコントロールを体感することができます。吉村先生からは、コンピューターシュミレーションのような産業革命以降の技術と、夜は火をたいて過ごすとか、天気の良いときには開いた窓から一定ではない風が抜けていくような、昔からの人類が育んできた経験が共に存在する状況を作ることの重要性を学びました。

また、僕は今のドイツのエコロジカルな建築の先進性というのは、チェルノブイリに起因するものではないかと思っています。バイオマスの技術への取り組みや社会の合意の中で容積率をはじめとした建築の全体の考え方を多様に組み立てていく方法論は、我々が参照すべき良い建築への 1 つのヒントのように感じています。また、意欲的な計画を温めている人に対して、その地域の自然環境の中で作ることをポジティブに容認して、テクニカルなサポートをしていくような職能も存在しています。そうしたしくみを実現するために、社会の合意が前提して存在しているということを忘れてはいけません。

高間——ジャーナリズムでの良い建築と、本当にその人にとっての良い建築というのは異なりますが、学生時代はジャーナリズムの良い建築に目を奪われがちです。近代建築という文脈で、国際的に評価された安藤さんと妹島さんは、ヨーロッパでは決してやらないような先鋭的な方法論が国際的に評価された結果であるといえるでしょう。今後は、先鋭的なだけでなく、技術的な要素を加えたほうが良いのではないのでしょうか。原発の問題やエネルギーの問題を取り上げる時に、何らかの具体的な提案とセットにして出すといいなと感じています。それが国際的に受け入れられれば、よい影響をもたらすのではないのでしょうか。

岩村——ドイツがよく環境先進国として取り上げられますが、確かに EU を先導し得る経済的基盤があり、その成熟した民主主義的市民社会がしっかりしているという背景があるのは事実です。その上で先進的と言われる環境政策があることを認識する必要があります。脱原発の政治的決断にしても、それを可能にするヨーロッパ全土をくまなく巡るインフラネットワークがセイフティネットとしてあることを忘れてはなりません。一方、日本は島国であり、そうしたインフラ網が整備されていない状況におかれています。このような背景の違いについて十分認識したうえで議論すべきだと思います。

エンジニアリングにおける可能性と職域

前——東日本大震災が発生し、原発の問題をはじめとして、これまでのシステムを振り返るきっかけとなりました。時間的経過を意識して、日本の建築における変化や継続性の観点からお話してください。

野沢——東日本大震災以前の大きな断絶として、太平洋戦争が挙げられます。戦後の家造りというのは累計すると日本中で 3~4 回程度の建て替えを経験してきたそうです。終戦後のバラックからはじまって、継続性のない建て替えを延々と進めてきてしまいました。経済行為として住宅が生産されてきた結果、建物に想定されている時間が短く、余計なコストがかかっては困るという前提のもとで計画が進められてきました。

NCR ビルディングを例にとると、ダブルスキンにしてサッシのコストが通常の 2 倍かかりましたが、通年のエネルギー消費は 40%程度削減されたという面白い実験結果も残っています。クライアントはアメリカ人で、この建物は 100 年持つだろうという認識の上で、サッシの値段が 2 倍になっても、毎年のエネルギー消費が大幅に減り、快適性も得られるのであればメリットが上回るだろうという判断をされたそうです。

日本においては、建築家が意欲的な取り組みをしたい時に、このエリアではこうした方がいいという高間先生のようなもう一人の相談相手が存在しにくい環境に置かれています。回収期間を短く想定した事業収支を定めた時に、もう 1 つ持続可能な建築のようなものがイメージとして存在すれば、長期的な収支を見据えた提案が入る余地があっても良いのではないのでしょうか。

大野——欧州では、専門のエンジニアリング会社が存在しています。日本では構造設計者は意匠設計者

とともに新しい建築をうまく一緒に作っているのですが、設備設計者は形態について一緒に考えるというところまでは至っていないように感じます。

野沢——JIA 環境建築賞の審査においては、近年の組織の環境建築がマニュアル化してつまらなくなってきたように感じています。クライアントを気にしすぎて、与条件を満たすことが目的化した優等生的な建築で、設計者が面白いと感じて、意欲的に取り組んだ領域がほとんど見えないことに危惧を覚えます。

宿谷——ソフトの話でいうと、環境や設備でいろいろなことができるのですが、環境のエンジニアリングにおける計算というのは徐々に面白くなってきています。コンピューターがいくら発達しても、人間がやるしかない部分がありますので、自分で計算したことと、肌で触れたことがつながっていくと面白く感じられるのではないのでしょうか。そうした教育の方法みたいなものが、建築も設備も欠落しているように感じています。

前——「体感がない」という議論があり、非常に優等生的であるというご批判がありました。他方、「伝統を継承していない」というご指摘もありました。それは相反するもので、体験できない環境に置かれている可能性もあります。社会との距離感を意識して、お話しを展開してください。

大野——バブルの時は、大量の業務に追われ、時間がなくて後回しにされたものもありました。時間をかけて問題に取り組むには、良い時期とは考えられないのでしょうか。時代が変わるということは、無批判に先輩の真似をしてはいけな時代が到来したとも言えるでしょう。

宿谷——僕は、プロセスについては真似をした方がいいと考えています。しかし、プロセスを学ぶための教育やそれを支えるマニュアルがあまりになさ過ぎるようになってきています。

大野——先生の背中を見てという教育は、忙しいときには疎かになってきたように感じます。こういう社会においてこそ、先生が教えることに意味を持つはずで。

岩村——すでに始まっている大きなテーマとして、これまでの新築を中心として形成されてきた建築業界から、大量のストックとして存在する既存建築と向き合う社会への移行が挙げられます。つまり、言ってみればヨーロッパ的な成熟社会に変貌することです。欧州にいた頃、友達の引っ越しに伴い家を改修するのによく手伝いに行きました。親も出てきて、窓や床や壁の改修方法や手立てについて事細かに教えてくれます。こうして住まいを長く使い続けるノウハウが伝承されていく様子を体験しました。そういう体験がベースにあって、人と住まいが繋がって来たのだと実感しました。

一方日本の場合は、住まいも末端まで産業化された仕組みを持つサービス産業社会が育っています。そうして供給される住宅に暮らしてきた世代が、住宅と自分を結びつけるような体験をする機会もないままに知識としての建築・都市を学び、社会に出ていく、そんな状況を危惧しています。

野沢——大学の教育には、相互的な観点が欠けています。意匠、構造、設備をはじめとして、様々な領域が相対的に補完して進めるということがあまりできていません。補完する領域が面白いという状況を作れば、そこに紛れ込む学生もいるのではないのでしょうか。どのように実現していくのかが課題と感じています。

大野——先ほども述べましたが、構造に比べて、設備分野に形まで踏み込んで提案できる人材が不足しているように感じています。教育における問題のようにも感じます。

高間——人数的には建築学科志望の方が多いので、建築家がカバーすべき問題なのではないかという議論もあります。

岩村——ドイツでは、構造設計者が構造と省エネの計算をしています。構法と一番結びついているのが構造設計者であり、建築家に比べて計算を得手としているという事情もあるようです。

野沢——現在では、アラップ社はエンジニアリング会社といえますが、最初は構造事務所としてスタートしていますよね。

大野——日本では、エンジニアリングのコンサルタントという職能が成り立っていません。プロジェクトの初期段階から独立して参加し、フィーを貰うという習慣が根付いていないように感じています。

高間——そうした役割を現状では建設会社が担っているのではないのでしょうか。エンジニアリングという分野では、5年くらいで大きな変化が生じていますので、長期的な変化を読み切れない部分もあります。エネルギー供給から変わってくるので、交換可能にしておくしかないという結論に達しています。ネクスト21では、スケルトンインフィルにして交換可能にしておりましたが、エネルギーシステムを変えることまでは想定していませんでした。電力についても原子力発電に関する考え方の変化により、これまでの方向性から変わる可能性も出てきてしまいました。

野沢——「聴竹居」は自然通風でという説明がついていますが、1930年代に竣工した建物であるのにもかかわらず、あらゆる部屋にコンセントがあり、鋳物でつくった電気ヒーターもあり、現在でいうオール電化住宅のような位置づけだったそうです。ただし、そのころの電力は、水力だったので、CO2は関係ありませんでした。電力が何によって作られるかが変わってしまえば、電力そのものが問題になることはありません。

岩村——気になっているのは、日本でもいわゆる「生活の質 (QOL)」という言葉がよく語られるようになりましたが、具体的に何が生活の質なのかという概念や価値観が日本の中で共有されていないことです。戦争を挟んで、それが断絶してしまったまま、ひたすら多様化が進んできたのではないのかと感じています。概念が共有されなければ継承できないし、それを実現するためのテクノロジーにぶれが生じる、そんな気がしてなりません。

野沢——面白いことがなぜ成立してきたのかということ、建築教育の場で複合的に説明できるようにしたいと考えています。軽井沢の「星野旅館」に行ってきたのですが、小さな水力発電所が動いていて、素晴らしい景観を沈砂池が作り出しています。水力発電で石がタービンの中に飛び込むのを防ぐために膨大な池が存在し、一度沈めた水が水路を急激に落ちて、発電しています。星野旅館ができた当時、公共河川から取水する権利を得ているのですが、操業し続けてきたことで権利を維持することができた、という背景があります。そうしたからくりを人々が知ることで、電力の生産方法を再考するきっかけとなったり、個々の住宅の川上から川下までのエネルギーの収支を自分で考え直す面白さを獲得したりするのではないのでしょうか。

若手実務者や学生に向けて

前——最後に、若手に向けて助言をお話してください。

大野——社会に入るとある程度流されざるをえないので、学生の時代に自分の世界をある程度作っておく必要性を感じています。自分なりの価値観に対して、相談や助言がもらえる先生や先輩を早く見つけるといいのではないのでしょうか。それは大学や会社という縛りにこだわらず、面白い人がいれば積極的にアプローチしてもよいのです。会社組織の中にも、40歳を過ぎても外との関係が築けていないと評価につながらないように感じています。

岩村——さきほど指摘したように、成熟化する社会といわれていますが、どのように成熟化すべきなのかについては実は語られていません。そこで一番戸惑うのは若い人たちなのだと思います。学生と話すと感じるのは、正解を手っ取り早く求め過ぎているのではないかということです。

それにしても、日本なりの共通意識のようなものが社会的合意に至るまでは、時間がかかることでしょう。もしかすると未来永劫できないかもしれません。日本の社会における合意形成には言語化されない「空気感」ともいべき感覚が支配的で、必ずしも論理的とは言えない、そんなプロセスを内包しているからです。

そういうなかでも、正解でないことを恐れず、失敗を経験することは間違いではない、ということを中心掛けられると良いのではないかと考えています。

宿谷——私は、まず自分が面白いと思ったことをやり続けなくてはいけないと考えています。そして、その面白さを若い人たちとシェアできるように活動していきたいと思っています。学生を指導する立場にいますが、最近強く感じるのは圧倒的に女性のほうが自立する気風があって、そうした風潮には期待をしています。女性だけでなく、それに引きずられて男性もがんばれよと思っています。

高間——僕の場合は、自分の家が原点になっています。自宅を建築するにあたって、雑誌でアンダーグラウンドアーキテクチャーというテーマに取り組んでいる建築家を発見しました。手紙を送ってみると、

見学に来たらどうかという返事が来ましたので、訪問しました。彼の考え方が「環境に配慮した建築をつくらなくてはいけない」というもので、とても影響を受けました。ソーラーについても、コロラドにいる先生に問い合わせたところ、来ないかという形で話がすすみました。他にも一緒に仕事をした先生達に導かれてきたように感じます。

僕がいま学生ならば、アメリカで勉強した方がいいのではないかと感じています。自分がずっとそうした環境にいたわけではないですが、考え方は滞在した経験を通じて決まっていくようなこともありました。仕事を介した滞在となると状況が変わってきますので、若いうちにいったほうがいいのかもかもしれませんね。

野沢——僕自身は良い意味で挑発的なやりとりをしたり、面白いことを言ってくれる人の傍にいたり、他の人があまりやらないことに取り組んできました。つい最近では、RCの3階建ての建物を2階に減築するという計画を手掛けたのですが、構造設計者の山辺豊彦さんが、少年のようにコンクリートを切断するさまを面白がっていたのが印象的でした。この計画にしかない面白さというのをプロジェクトに入れ込む。ドキドキするような面白さというのは既にあるものの中にも、自分なりに忍び込ませることができるものです。

建築は、複雑で難しい領域ではありますが、意図を持って建築に対して向きあうと、ドキドキするほど面白いことというのはたくさんある領域だと思います。自分なりの独自の領域を探していただきたいと願っています。

—以上 2013 年 1 月 10 日、日本建築学会にて—